

体育の目標-内容-方法における一貫性についての一考察

中 塘 二 三 生*
石 川 旦*
西 尾 貫 一*

An Observation on the Consistency among Physical Education Objectives, Contents and Methods

by

FUMIO NAKADOMO*, NOBORU ISHIKAWA* and KANICHI NISHIO*

Abstract

It is the present authors' view that there must be a logically integrated consistency among stated objectives, selected contents and applied methods in the programs of physical education. With this view they observed analytically several textbooks in the area of principles of physical education in terms of those authors' views of the consistency and their presentations of objectives, contents and methods. And, based on this observation the present authors tentatively formulated one-to-one coresponding relationships among physical education objectives, contents and methods. Followings are the findings obtained from the observation:

1. The main factor which determines the legitimate status of physical education in general educational program might be thought of as objectives stated as possible potential contributions of physical activities to the developmental qualities of the individual person.
2. The main stages for constructing physical education programs were thought to be formulation of objectives, selection of contents, decision of methods, and setting criteria for evaluation.
3. The above stages must be consistently structured with close referential relationship with each other. However, emphases on the relationships between and/or among items were found different among authors referred in this study; consequently, corresponding consistencies displayed in those textbooks were not identical. [Proceedings of Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo, No. 8, 85-95, 1974]

* 東京大学教養学部体育研究室 (Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo)

緒 言

体育の概念規定に関して、現在までのところ、必ずしも厳密な意味における見解の一致がみられているわけではなく、それ故、その中心的な構成要素である目標、内容および方法についても、必ずしも厳密な意味において大多数の専門家の間において見解が一致しているわけではない。このことが現状において歓迎されるべきことか否かは別として、体育が一般教育の統合的一分野として、人間形成に対してその独自の社会的機能を成功裏に果していくためには、このような見解の不一致は、ある意味ではマイナスであり、教育における体育の位置づけを低く評価させる誘因ともなりかねない。とくに、体育が現実の指導の実践において、確実にその意図した方向において効果的に成果をあげるためには、達成可能な価値が具体的目標として適切に表明され、個々の目標を達成するための適切な活動内容が媒体として選択され、そして目標を達成するための適切な活動内容を操作して実質的な成果を生ずる具体的な方法が広義の技術として組織化され、運営される必要がある。

このような体育における目標・内容・方法の一貫性の保持については、従来学習指導要領の編纂に当って検討されてきたようであるが、必ずしも実質的な成功を納めてきてはいないようである。

前川は、その著作「体育原理」を叙述するに当って、「体育の目標・内容・方法の一貫性を原理として一つの筋を通してみようとしてまとめあげることにした¹⁾」と述べている。また、体育原理の主要な態度として、「体育の『目的-内容-方法の一貫性』という観点に立って研究をすすめていくことになる²⁾」とも述べている。

A. D. Munrow は、「教育において、原理は目的と同様に手段を取扱う必要がある。体育においては目的と手段が非常に強く相互に関係しあうので、一方の論議はもう一方とつねにかかわりをもつことになる³⁾」と述べ、彼の著作の構成として、「体育のいくつかの可能な目的に論議の中心をおいているが、手段(すなわち教材と方法)は折にふれ論議の中に取り込まれてくる。それが論議にかかわりをもってくるのは目的の分類と正当性に

関するところで、そのような取り扱いは、少なくとも一貫性のメリットをもっている⁴⁾」として、やはり、この三者の間の一貫性の保持ということをはっきりと意識しているとみることができる。

その他、必ずしも一貫性 (consistency) ということばを使用しなくとも、そのことを明らかに意識して叙述された体育の原理の分野の著作をいくつかあげることができる。

この小論は、このような体育の原理の領域におけるいくつかの文献を資料として、体育の目標・内容・方法の間の関係がいかにかえられ、具体的にそれがどのような形で提示されているかを検討し、これらの考察を基礎にして筆者らのこの問題に対する見解を試論の形で提示することを目的としてまとめたものである。

理論としての体育原理が、何を中心テーマとし、いかなる理論的枠組において内容を構成すべきかについても、まだ十分な見解の一致がみられているわけではない。しかし、体育の目標・内容・方法の一貫性の保持は、おそらく、その共通の中心的テーマになりうるものと考えられる。このことが十分に検討されない限り、体育実践における形式主義は消去されず、実質的な体育の成果は十分に期待できないと考えられるからである。

本小論をまとめるに当っては、つぎの4つの文献を主要参考資料とし、必要に応じて他の著者の文献を参照した。

Williams, J. F.: *The Principles of Physical Education*, 8th, ed. 1964.

Bookwalter, K. W. and H. J. Vanderzwaag: *Foundations and Principles of Physical Education*, 1969.

前川峯雄: 「体育原理」<現代保健体育学体系1> 1970.

Larson, L. A.: *Curriculum Foundations and Standards for Physical Education*, 1970.

考察の手順はつぎの通りである。

1. 体育の正当な位置づけのための要因
2. カリキュラム構成の必要条件
3. 目標・内容・方法の関連について
4. 一貫性の事例
5. 批判的考察

6. 一貫性についての試論

- (1) 体育の概念
- (2) 目標、内容および方法の概念
- (3) 一貫性のあり方
- (4) 具体的提示

1. 体育の正当な位置づけのための要因

体育は一般教育の中にいかに位置づけられるか、その理論的根拠はどこに求められているのであろうか、教育における体育の正当性をどのように表明することができるのであろうか。

J. F. Williams は、この疑問に対して直接的につぎのように述べている。すなわち、「カリキュラムの中で体育の位置を決定する場合の最も重要な単一の要因は、それを取りまく一まとまりの理念であり、それをとりまく哲学的正当性であり、それが献身するところの目的である⁹⁾」と。

これと同様の考え方は、Bookwalter と Vanderzwaag によっても述べてられており、彼らは、「あらゆる主要な社会的機能は～その独自の必要性あるいは目的に適合しなければならない¹⁰⁾」とし、さらに、「すべての原理にとって基本的なことは～プログラムの目標である。～各教科に独自の中間的目標は、その教科の全体的教育プログラムに対する本質的な貢献のタイプを示す。体育は人間の発達のつぎの4つの側面に第一義的な必然的な貢献をするものと想定する¹¹⁾」として、(1)器官の発達(体力)、(2)神経筋肉の発達(スポーツ習慣とスキル)、(3)認識の発達(スポーツの理解)および(4)情動の発達(スポーツマンシップ)をあげている。

前川は、「体育をもって、身体運動を媒介とし、手段とするところの教育であるとした。したがって体育における教育的可能性は、身体活動そのものの持つ特性によって条件づけられよう¹²⁾」と述べ、さらにつづけて、「もしそれを適切に用いることによって、人間の健康の維持や発展のため、知識・技能・態度などを育て、実際に被教育者を健康に向わせることができ、健康または健康教育がねらっているものと同一のものを実現したとしても、われわれの規定からすれば、どこまでも体育であるということに異論がない筈である¹³⁾」

と強調し、結論的には、「保健的配慮なしには体育は成立しないともいえる¹⁰⁾」と云い切っている。

L. A. Larson は、「いかなる分野においても、最も重要な決定は、それがもつ可能性の特性と範囲に関するものである¹⁴⁾」と原則を述べ、具体的にはつぎのように説明している。すなわち、「教育目標に適合した参加を計画する場合には、一般人には、身体活動から結果として生じうる、または生ずべき、個人的諸特性をはっきりと定めなければならない(質的体育)。また同様に、各個人がその年齢、成熟度および個人差に応じて可能な発達のレベルを確立することが必要である(量的体育)。もし、これらのプログラム目標が教育計画者によって達成されるならば、そのための参加の機会が準備された場合、身体活動から完全な価値が獲得されるだろう。このような計画は、体育が当然そうであってしかるべき教育プログラムの重要な一部分になり、個人の市民性や個人の福祉の準備に対して寄与することを保証する¹⁵⁾」と。

以上のような一般的な見解の表明のほか、A. D. Munrow のような限定的や意見もある。すなわち、彼は、「プログラムは、原理の明確化に伴って生ずる諸目標を反映するものでなければならない¹⁶⁾」と述べたあと、「私にとっては、いかなる体育プログラムの本質も、身体的スキルの獲得のための機会を提供するものでなければならない。早期の直接的で、一般的な意味において、これは、各子供にとって、自分自身の身体発達と修練を通して達成され、長期的には、彼がその成員であるところの社会にとって適切なある種の活動のマスターを通して達成される。もしこれら2つの手段が成功的であれば、個人は彼自身の人格を表現し、実現することができる機会をもつことになるであろう¹⁴⁾」と述べている。

要約すれば、体育を教育の中に正当に位置づける重要な要因は、体育の理念すなわち独自の価値を示す目標の表明であり、それは一般的には、身体活動に内在する人間の発達可能性に対する貢献可能性の形で表明され、より具体的には、身体的スキルの獲得の機会を与えるところにその中心的論拠があるということができようか。Munrow

の第2の優先順位は身体的発達であり、他のものは副産物として偶然的に達成されるとしている。しかし、この見解に対しては当然異論が見出されるであろう。

2. カリキュラム構成の必要条件

体育の正当な位置づけを保証する要因は、目標として表明された人間の身体活動がもつ独自の人間の発達に対する貢献可能性であると考えられているとみることができるが、このような形で専門的機能を託された実際の体育はどのような条件のもとに、あるいは段階を経て構成（あるいは組織化）されているのであろうか。

L. A. Larson は、このことについて、「体育カリキュラムの設定条件は哲学と科学である。それは『何を』それがすべきかということと、『いかに』それが達成されるかということから出発する。これがカリキュラムの基盤である¹⁵⁾」と述べ、さらに、「体育のカリキュラムは信念をもって準備される。一般に人は、発達させられるべき、あるいは発達される諸特性について決定しなければならない。そしてつぎに、その諸目標を達成するために本質的に必要な適切な諸活動と指導過程について決定しなければならない。個人や集団の現在における可能な発達のレベルが、手許にある最も重要な事実であり、それをいかに取り扱うかという判断が、さまざまな目標が最も効果的に達成される「内容」と「方法」を示すことになる¹⁶⁾」と述べている。そして具体的には、「プログラムは、期待された目標に従って計画される。そのような計画は、身体活動が適切に適用された場合に、各個人のために何を達成することができるかということを証明する諸事実に基礎をおいている¹⁷⁾」と説明している。

Bookwalter と Vanderzwaag は、「活動、方法および経験の決定と体育の成果の選択は、発達の目標に照してより直接的になされる¹⁸⁾」とし、「カリキュラムあるいはプログラムの問題領域に特有な側面は、目的、目標、成果、活動または内容、方法、教材、参考資料および評価を含んでいる。これらの側面の各々に対して基準が公式化され、標準が定められるべきである¹⁹⁾」と主張して

いる。

Williams および C. C. Cowell と W. L. France はこの問題について直接的に具体的見解を示している。前者は、体育のカリキュラムを展開する必須の段階として、つぎの5つをあげている。すなわち、(1)状況の分析、(2)教育されるべき個人の特性の評価、(3)プログラムの目的の表明、(4)めざすべき目標の表明、および (5)状況、生徒の特性、目的および目標との関連における活動の選択²⁰⁾である。

これに対応して、後者は、「1つの効果的な体育のカリキュラムが結果として生ずるためには、つぎの4つの主要な問題に対して満足な解答が与えられなければならない²¹⁾」として、(1)体育科はどのような教育的目標を達成しようとするべきか(目標)、(2)これらの目標を最もよく達成するためにどんな教育経験が準備されるべきか(活動の選択)、(3)いかにこれらの教育的学習経験は最もよく組織されるか(指導法)、および(4)いかにわれわれはこれらの目標が達成されていることを決定しうるか(評価)の4項目を提示している。

これらを要約すると、カリキュラム構成の必要条件は、形式的にみれば、(1)目標の表明、(2)活動内容の選択、指導方法の組織化、および(4)成果の評価の4つの段階をもつものと考えられているとみてよいであろう。

しかし、実際はこのように簡単な形式ではなく、このいくつかの条件の相互作用として、また個人の強調性や観点のおき方によって、多様なカリキュラムが構成されてきているとみてよいであろう。

3. 目標-内容-方法の関連についての考え方

それでは、実際に専門家の間では、目標-内容-方法の関連性について、どのように考えられているのだろうか。

前川は、すでにふれたように、体育における目標と内容と方法の間に論理的な一貫性が現実的に保たれるべきことを前提としているようにみえる。彼は、極めて一般的な表現としては、「体育とは～人間形成という大目標にいたるための方法ということができよう²²⁾」と述べたあと、「実際におい

て、仮にねらいや達成させたいことがあっても、方法的に実現できないとすれば、それは結局、単なる期待や願望にすぎないのである。したがって体育の任務は、目標、内容の方法化が行なわれたところで終了するといつてよいのである²³⁾として、方法の重要性を強調しているようにみえる。もちろん、彼においても思考の段階として、まず達成可能な目標の明確化をし、つぎにそれを達成するための手段や内容を考え、予想した目標を最も合理的に達成しうる指導過程上の原理や原則を究明しようとしているのである。しかも、彼は、「体育において具体的にとられる方法は、内容や目標のいかんによって、まったく複雑極まりないものである²⁴⁾」ことを認めている。

Williams は、体育の目標を3つに分類し（技術的、関連的および随伴的目標）、「そのような目標は方法と密接な関連をもっている²⁵⁾」と述べ、また、「目標との関連において方法を考えることは、指導の最も重要な原理である。期待された成果は何であるか。この成果を確保するために特定の方法が選択される²⁶⁾」と説明している。また、「最善の方法は、ねらった目標を達成するものである。それは、その目標との関連においてのみ最善である²⁷⁾」とも述べている。彼は、活動内容選択の基準の1つとして、「活動は、ねらった目標の実現に寄与し、目的と調和しているべきである」という原理をあげている。そして、実際には各活動内容に対する具体的目標を表明している。しかし、彼は、「人は一般的に教えることはできない。人は特定のものを教えるのである。しかし指導においては、すべての教師が、ある1つの経験における学習は多面的であることを認識することも重要である²⁸⁾」ことを指摘している。

Bookwalter と Vanderzwaag は、体育の目標が効果的にしかも経済的に達成されるべき体育カリキュラム構成の原理の中で、体育の目標と活動に関連するものとして、つぎの3つを掲げている。「妥当性：選択された活動は体育の1つあるいはそれ以上の目標に貢献しなければならない」、「全体性：各性およびどの学年レベルに対しても、選ばれた活動の全体は、それぞれのすべての妥当な目標に対して最適な貢献可能性をもたねばなら

ない」、および「相対性：活動は、体育の目標および学習者の必要性の全体に対するそれぞれの相対的貢献によって選択されなければならない。³⁰⁾」彼らは、とくに方法と他の2つの項目との関連については明確に言及していないが、つぎの表現は、その一端を示すものとみてよいであろう。すなわち、「目標は、教育的事業によって、そのために保持される価値を示す。～それらは、指導過程と活動あるいは内容の選択の方向づけをし、最終的な結果を検討するための基準である³¹⁾。」

L. A. Larson は、「体育の目標は、活動それ自体ではなく、その活動の中に含まれる人間の可能性の成就である。云いかえれば、目標は、身体活動において成功的に満足して参加するために必要な、すべての個人的特性の人間の発達である³²⁾」と規定し、「体育の目標といろいろの年令と成熟レベルにおける到達基準の設定は、プログラムの内容が、個人の発達のための最適の可能性を与えるように計画されるのでなければ、全く価値のないものである³³⁾」と主張している。そして、彼は、「体育における諸経験の価値の決定は、目標から始まる³⁴⁾」とし、しかも、「科学的に妥当な体育とは、個人や集団の諸能力の達成が、その到達可能性の最適のときに、最も活発に求められることを意味する」と考え、体育の必要性や価値は、個人の発達期の各期で異なるので、体育の実際もまた異ならなければならないということを強調している。

A. D. Munrow は、その著述の手順として、各目的を検討するとき、折にふれて、その特定の目的が最もよく達成される手段についての論議を行ない、「この方法において糸がたどられ、目的と実践との1つのパターンが合流しはじめるだろう³⁵⁾」と述べている。

江橋は、「一般に教材ないし学習内容とは、体育の目標を達成するため、生徒児童が具体的に学習する事柄、あるいは生活経験の総体というべきものである³⁷⁾」とし、「体育科に関していえば、一方で体育科の目標達成にふさわしいかどうかという観点から選ばれると同時に、それが生徒児童の身心の発育、発達段階からみて、それぞれの年令段階における諸能力の発達にふさわしいもので

あるか否かが検討されねばならない³⁸⁾」と説明している。

このように、取りあげたすべての専門家においては、体育の目標と活動内容との密接な関連性が強調され、また目標と方法あるいは活動と方法との関連が強調されているとみることができる。多くの場合、その発想の方向は、目標→内容→方法の順であるように見うけられるが、目標と方法が同時であったり、活動内容と目標が同時であったりする場合がみられた。おそらく、L. A. Larsonの考えのように、身体活動を通してどんな人間的発達の価値が実現されるかという発想から目標が決定され、その価値を実践的に実現するための条件あるいは手段は何かという観点から方法が組織化されると考えられるであろうが、この問題はさらにあとで検討することとする。

4. 一貫性の具体的事例

以上、一貫性を検討する前提条件をみたうえで、ここで本研究の主要参考資料とした文献から一貫性について具体的提示を例証的にとりあげてみようと思う。

(1) J. F. Williams の場合

A. 体育の目標

- a. 技術的目標：スキル，筋力，持久力，器官能力
- b. 関連的目標：知識，洞察，理解
- c. 随伴的目標：鑑賞，態度，理想

B. 体育の活動内容

- a. 適応的活動
- b. プレイ，ゲーム，スポーツ
- c. ダンス
- d. 自己テストの活動，スタンプ，闘技
- e. 基本的スキル：走，跳，投，懸垂など
- f. 野外のキャンプ活動

C. 体育の方法

- a. 技術的学習における方法の原理
- b. 関連的学習における方法の原理
- c. 随伴的学習における方法の原理

D. 体育の成果

- a. 器官系統の発達
- b. 神経筋肉のスキルの発達

c. プレイの興味の発達と余暇利用

d. 社会的道徳的行動基準の発達³⁹⁾

彼においては、活動内容のすべてがそれぞれ3つの目標と関連をもち、4つの成果を生み出すというように考えられているとみてよい。そして、方法は3つの目標との関連において各活動とかわりをもつと考えられる。

(2) 前川峯雄の場合

A. 体育の目標

- a. 理想としての全面的発達：民主的人間の形成
- b. 発達の目標
 - ① 健康的目標：健康の保持・増進
 - ② 身体的目標：身体発達，体力，科学的知識，実践的態度・習慣
 - ③ 運動技能の目標：豊かな生活や健全な生活に向うための運動技能
 - ④ 社会的目標：社会的態度や能力の発達
 - ⑤ その他の目標

C. 生活的目標

- ① 余暇生活と体育目標：意欲，運動生活集団の構成，施設づくり
- ② 職場体育：気分転換，気晴し
- ③ 生活の全体構造と体育：余力，趣味としての運動生活

B. 体育の内容

- a. 体操
- b. スポーツ
- c. ダンス
- d. 野外活動

C. 体育の方法

- a. 生理学的原理（体力づくりの原則）
- b. 心理学的原理
- c. 社会学的原理

より具体的には、内容に即した方法原理として、

- a. 体力づくりの原理と方法
- b. 運動技能づくり
- c. 表現
- d. 野外（自然）活動

の4節をもうけて説明している。

彼においては、確かに活動内容と方法との対応関係はととのえられているとみることができる

が、それらと目標との関連性は、目標の表明の明確さの程度とも関係して、必ずしも明らかではない。

- (3) Bookwalter と Vanderzwaag の場合
- A. 体育の目標 (中間的発達の目標⁴⁰⁾)
- 器官の発達 (体力)
 - 神経筋肉の発達 (スポーツ習慣とスキル)
 - 理解の発達 (スポーツの理解)
 - 情動の発達 (スポーツマンシップ)
- B. 体育の活動内容 (中学校の場合)
- 管理的および衛生的諸活動
 - ダンス活動: 表現的・創作的運動
 - スポーツ活動: 競技的スポーツ
 - 体操活動: 矯正または治療, 形式的活動, 自己テストの活動
- C. 体育の方法
- 準備の段階: 学生の必要性の決定, 教材の分析・選択, 視聴覚教材の選択と配置, 指導案の作成, 指導の場の設定
 - 提示の段階: 導入, 論理的な教材の提示, 学生の最大参加
 - 応用の段階: 学生の直接的対応の準備, 競争の利用, 課外への応用
- 彼らは、この直接的成果として、上記の4つの目標が、それぞれの特性的条件において達成されるものと考えている。すなわち、器官の発達は、Condition Controls として ① 成長, ② 栄養, ③ 体力, ④ 筋力, ⑤ 持久力が、神経筋肉の発達は、Fixed Controls として ① 習慣, ② スキル, ③ バランス, ④ 柔軟性, ⑤ スピード, ⑥ 加速度が、理解の発達は、Adaptive Controls として、① 知識, ② 判断, ③ 洞察, ④ 理解が、そして情動の発達は、Pattern Controls として ① 態度, ② 鑑賞, ③ 理想, ④ 情緒が、それぞれ発達するものとみているのである。
- (4) L. A. Larson の場合
- A. 体育の目標 (中心的価値⁴¹⁾)
- 個人の健康
 - 人間個体の効果的使用
 - 人間個体およびその発達と保持に必要な過程についての知識, 理解, 認識
 - 社会的存在としての個人

- 個人と民主的指導性および従属性
 - 自己集団適応の個体としての個人
- B. 体育の活動内容
- チーム, 対人的, 個人的スポーツ
 - 集団ゲームや諸活動
 - 水泳
 - リズムとダンス
 - ダンプリングと体操
 - 体力調整およびトレーニング運動
 - 治療・矯正運動
- C. 体育の方法

Larson の場合は、目標達成のための具体的な方法についての検討が与えられていない。しかし、人間の発達の基礎的基準として、a. 頻度, b. 持続, および c. 強度の概念をあげている。

以上、4つの主要文献から、それぞれの一貫性に関する具体的事例を取り上げてみたが、著者の立場や視点の多様性に依拠して、実際の目標-内容-方法の提示も多様性をもつことが示された。それは、各著者がもつ原理を反映して目標が表明され、それに従って内容や方法が決定されるのであるから、その多様性は必然的な論理的帰結といえることができるであろう。

しかし、体育が1つの独自の教育分野として、その社会的機能を統一的にしかも効果的に果たすためには、このように、1つの機能がその本質的あり方において多様性を有してよいものだろうか。体育を理論的に構想する上で、専門家の間における共通の枠組があってしかるべきではないだろうか。しかも、その実践において、目標と活動内容と方法とが統一的な一貫性を保っていることは、個人的なレベルにおいても、重要な意味をもつものと考えられる。

つぎに、このような観点から、これまでの専門家の見解に批判的考察を加え、最後に筆者らの見解を示したいと思う。

5. 批判的考察

(1) 体育の正当な位置づけについて

この小論で取りあげた専門家たちについて、その見解を整理して結論的にいえば、体育の正当な位置づけを保証する要因は、目標として表明され

た身体活動に内在する人間の発達に対する貢献可能性にあるということができよう。多くの専門家たちは、その第一義的なものを、表現の形式の差はあれ、身体的技能の発達におき、つぎに器官の能力すなわち体力の保持増進においている。

しかし、問題は、このように表明された具体的価値が、現実的どの程度まで実現されるかということである。多くの専門家は個々の具体的な身体活動がもつ内在的特性を認めている。そして、その活動への参加における個々の学習者の経験内容も様でないことを認めている。

ここにおいて、期待された価値を出来る限り多くの学習者において、可能な限り様に体現させようとして活動の機会を組織化するのが方法である。この方法が現実的に具体的に工夫され、熟練した手腕によって手順よく運用されるのでなければ、期待された価値、すなわち発達の側面に対する確実な貢献はなされえないであろう。それ故また、体育の正当な位置づけの確保も十分にできないであろう。

体育の正当な位置づけは、単なる体育の目標の表明のみでは確立されるものではなく、当然のことながら、その実践における確実な成果の達成によって、一般的な評価をうけるものであると考えられる。

(2) 体育カリキュラム構成の条件

資料に現われた基本的な共通項目は、目標と活動内容と方法であり、人によっては、これらの前に前提条件として個人の発達の諸特性の検討が加えられ、またあとに評価の項目が加えられている。

ここで、とくに問題とせられるべき事柄は、対象の発達段階における特徴である。目標や内容や方法の分析は一般的な形式でも行なうことが可能である。しかし、体育の現実における対象は、ある発達段階におけるある発達の特徴をもった個人であって、しかも、個人のそのときどきの発達の必要性は、個人差がありまた変化するとみることができる。これらの諸変化に正しく適合して体育のカリキュラムを構成するためには、対象をとりまく状況の分析と個人の発育発達の経過を的確に評価して、目標や内容や方法の強調性を明示する

必要がある。

このためには、高度の専門的素養と技術をもった指導者が必要とされるだろうが、このことも、カリキュラム構成の重要な前提条件として指摘しておく必要があるであろう。

(3) 目標・内容・方法の関連について

(この三者の一貫性について最も明確に言及しているのは前川のみであるが、しかし、多くの著作において、目標と活動内容の、あるいは目標と方法の密接な関連性が強調されている。

ここで問題とされるべきことは、真実、ある具体的目標が、妥当な活動内容を媒介として組織的に操作されることによって達成されることを実証できるということである。もし可能であるならばそれぞれが一对一の対応関係をもって実現されることが理想であろう。たとえ、そうでなくとも、それぞれがそれぞれの強調性において対応関係をもち、その成就が確実に実証できることが望まれる。そして、この問題を考える場合の第一段階は、目標と内容の対応関係を考えることである。人は多くの事柄に同時に意識を集中して努力的な活動をすることはできない。意識は1つの事に集中してはじめてその事柄を十分に把握し、そこから期待された成果をくみとることができる。それ故、第二段階は、活動の条件を目標の実現に適合するように方法的に組織化し、操作することである。

このように、例えば、基礎的なスキルの獲得を目標として設定するのであれば、そのための活動内容(例えば、Movement Education)を選択し、スキルの獲得に関する学習理論をこれに方法的に適用することを考えるのである。

結論的にいえば、この目標と内容と方法との間には、確実な論理的一貫性があるべきで、それが実践的に証明しうるものであるべきであるということができよう。

(4) 一貫性の具体的事例

以上の考察を基礎にして、専門家によって具体的に提示された目標、内容および方法を検討してみると、そのすべてにおいて、これら三者の間の対応関係は、必ずしも統一性を保っているとはできないようである。

Williams の場合は、活動内容のそれぞれが目

標の複数のいずれかあるいはすべてと関係づけられうるし、前川の場合には、目標の整理が明解ではなく、やはり内容との対応関係が必ずしも明白ではない。Bookwalter と Vanderzwaag の場合は、方法の提示が余りにも一般的な形式においてなされており、三者の関係は直接的には明らかにされていない。Larson の場合は、テキストの性質上、方法については論じていないが、活動内容のそれぞれが、何らかの形式で目標のいくつかあるいはすべてに関連をもつものとみることができる。

確かに、一つの具体的な身体活動は、それに個人が参加することによって、さまざまな成果をさまざまな程度に達成することができる。そして、たとえある1つの目標をその具体的な活動によって達成しようとしても、必然的に他の諸価値が成就されることがあろう。しかし、体育は意図的な活動でしかも操作的なものである。できうることならば、我々は、ある明確に意図したねらいを組織的な操作的活動によって達成した方が、より確実に成果を蓄積することができるのではないかと考えられる。それ故、筆者らは、つぎに、このような考えに立って、体育の目標・内容・方法の一貫性についての試論を提示してみたい。

6. 体育の目標・内容・方法の一貫性に関する試論

(1) 体育の位置づけ

従来そして現在も、体育は身体的なもの(活動)を通しての教育であると解されてきている。しかし、最近では、この中心概念あるいは体育の名称にとって代るかもしれないものとして、Movement Education, Movement Exploration, Art and Science of Human Movement とか、Sport Education とかという名称(概念)が提唱されている。

しかし、いずれにしろ、体育が種々の身体活動を媒介として、その経験を通して、直接的(技術的)には、健康を増進し、体力を高め、身体的スキルを獲得し、間接的(関連的)には知的理解を深め、随伴的には情緒の安定や社会的行動基準を体得するものであることには変りはないと考えられる。

とくに、現代の文明社会においては、人間関係の緊張と身体活動の不足が、人間の自然な健康をむしばみ、いわゆる現代病あるいは現代文明による退行的疾患の流行を起している。体育は教育の中で、あるいは個人や集団の生活活動の中で、それが合理的に処方された身体活動を媒介とするその特殊性において、人間の福祉と発展に独自の貢献をする可能性をもつものであることが、ますます明確に認識されるようになってきた。

人間は身体活動をするために創られているという自然的生物的存在としての本質的特性が、現代文明において、体育を無視あるいは否定できない社会的機能の1つにしてきている。

この機能を十分に果すためには、体育はその基本的構成部分、すなわち、目標と内容と方法において、いかに考えられ、また実践的に組織されなければならないだろうか。

(2) 目標、内容、方法の概念

目標は、体育において個々の学習者の中に実現すべき、また実現可能な価値を示す。それは、一般教育、すなわち全面的な人間形成のための働きかけにおける目標の表明と一致し、その中に含まれるものでなければならない。いいかえれば、人間の諸価値としての発達の特性の実現に寄与するものでなければならない。それ故、それはまた、対象の発達段階や個人の発達状態に応じて多様でありうる。さらに、重要なことは、人間の生命活動の階層性に基づいて発達の目標を表明することである。これによって、対象の必要性に対する目標の重要性が明確になり、対応する活動内容の選択も、より直接的に適切に行なうことができる。

内容は、体育において利用される身体活動がその中にもっている経験的特性で、体育においてはそれは具体的には目標と対応する形において把握されるものである。これは、より直接的には活動の内容そのものとみることでもできる。そして、これは価値の実現に対する手段あるいは媒体とみることでもできよう。

身体活動は、その中のどの二つをとってみても全く同じものはない。それ故、それらがもつ目標に対する貢献可能性にも差がある。目標に対して最も直接的に貢献しうる活動内容を選択する必要

性が、ここから出てくる。

方法は、体育における広義の技術的あるいは操作的過程あるいは手順である。これは指導の準備の最初から、最後の評価の段階まで十分に注意して緻密に組織化される必要がある。狭義に解釈すれば、これはある特定の目標を達成するために、内容との関連において適用された指導手順あるいは方法原理とみることができよう。

方法は確固とした科学的知識の裏付けが必要である。最近、この方面での専門的基礎的研究による知識や技術の蓄積は、ますます大きくなりつつあるので、その実践への応用が大いに期待される。

目標は理念であり、価値を表わす、内容は概念であり、媒体を示す、方法は技術であり、内容を通して目標を実現する実際的な操作的手順である。この三つの項目をどのように統一的に組織構成するかが、一貫性確保の現実の問題である。

(3) 一貫性の確保

体育の目標・内容・方法の一貫性とは、筆者らにおいては、この三者の間における可能な限りの一対一の対応関係の現実的実際的存在を意味している。それは最終的には表明された目標の達成の程度、すなわち成果の評価によって判定されるべき関係である。

達成可能であるということは、体育において選択される身体諸活動が、それぞれの程度に応じて目標の実現可能性を内包していなければならない。それ故、おそらく、体育の目標の決定は、活動内容の特性の分析に依存すると考えるべきであろう。

方法は科学の裏づけをもつものであり、それは基礎的研究が進展するにつれ、つねに新しく改善されなければならない性質のものである。その原則は、方法の合理性、すなわち安全性、効率性、適合性等、の基準に対する適合性である。

Williams は、目標と方法を直接的に対応させて論じており、又、一般に目標の表明に当っては、彼の分類概念を採用して論ずるものも多いが、筆者らはむしろ、Larson の目標設定に近い立場をとり、ここでは提示の複雑さを省くために、年齢段階に応ずる検討は加えないことにした。つぎに、

試論として筆者らの考えを示してみたい。

(4) 目標・内容・方法の一貫性 (試論)

A. 体育の目標

- a. 基本的な健康の保持
- b. 積極的な体力の保持増進
- c. 身体的スキルの獲得
- d. 知的理解, 認識, 態度の発達
- e. 情緒の安定
- f. 社会性の発達
- g. 美的感覚の発達

B. 体育の内容

- a. 保健的運動, 矯正運動, 補強的運動
- b. 合理的に処方された身体的トレーニング運動, 激しいスポーツ活動
- c. 各種スポーツの基礎となるスキル, 特殊なスキル
- d. 人間個体, 運動種目, 運動力学等に関する知識, 生活における運動の必要性の理解
- e. レクリエーションなプレイ, ゲーム, スポーツ, 試合への参加
- f. チーム・ゲームやスポーツ
- g. 身体運動の中の美の鑑賞と創造

C. 体育の方法

- a. 個人の健康状態に応じて運動を処方し, 個人的配慮をもって指導する。
- b. 個人の体力状態に応じて運動を処方し, 個人的配慮をもって指導する。
- c. 個人のスキルのレベルに応じて, 各種スポーツの基礎スキルあるいは特殊スキルを適切に選択し, 指導する。
- d. 人間の運動に関連する知識の分野から適切にテーマを選択し, 指導する。
- e. 個人の性格に適合したスポーツに主体的に参加させることによって, 満足を得るように指導する。
- f. 集団的な行動の場の中で, 積極的に協力的に行動するよう適切な刺激を与える。
- g. 各種のすぐれた身体的演技の鑑賞の機会を与え, 又自らの身体を創造的に効率よく支配するための機会を与える。

要 約

J.F. Williams, 前川 峯雄, Bookwalter と Vanderzwaag, および L.A. Larson の著作を主要資料として, 体育の目標・内容・方法の一貫性について考察を加えた。

一般的な結果としては, これらの専門家は, 体育の位置づけの要因を体育の目標の表明におき, カリキュラムに構成諸条件として, 基本的には目標の表明→活動内容の選択→方法の組織化を考え, 目標と内容, 内容と方法, 方法と目標との密接な関連を強調しているようにみえた。しかし, 実際に提示された目標と内容と方法の間には, 必ずしも明白な対応関係を示す一貫性は認められず, 筆者らは, これらを批判的に考察したのち, 目標と内容と方法の間の可能な限りの一対一の対応関係を想定して, 一貫性の試論を提示した。

この試論の方法に関する部分はさらに詳細な検討を要するが, 目標を人間の生命活動の階層性という観点から表明し, それぞれに対応して直接的に貢献する活動内容を選択して配置した点は, この小論の独自な点であるといつてよいであろう。

引用文献

- 1) 前川峯雄:「体育原理」大修館書店, 1970. まえがき.
- 2) 上掲書, p. 8.
- 3) Munrow, A.D.: Physical Education: A Discussion of Principles. G. Bell & Sons, CO., 1972, p. 10.
- 4) 上掲書, p. 10.
- 5) Williams, J.F.: The Principles of Physical Education, 8th ed. W.B. Saunders, Co., 1964, p. 319.
- 6) Bookwalter, K.W. and H.J. Vanderzwaag:

Foundations and Principles of Physical Education, W.B. Saunders, Co., 1969, p. 3.

- 7) 上掲書, pp. 4-5.
- 8) 前川峯雄: 前掲書, p. 84.
- 9) 上掲書, p. 84.
- 10) 上掲書, p. 85.
- 11) Larson, L.A.: Curriculum Foundations and Standards for Physical Education, Prentice-Hall, Inc., 1970, p. 59.
- 12) 上掲書, はしがき.
- 13) Munrow, A.D. 前掲書, p. 238.
- 14) 上掲書, pp. 237-8.
- 15) Larson, L.A. 前掲書, p. 55.
- 16) 上掲書, p. 55.
- 17) 上掲書, はしがき.
- 18) Bookwalter, K.W. and H.J. Vanderzwaag: 前掲書, p. 5.
- 19) 上掲書, p. 10.
- 20) Williams, J.F.: 前掲書, p. 321.
- 21) Cowell, C.C. and W.L. France: Philosophy and Principles of Physical Education, Prentice-Hall, Inc, 1965, p. 145.
- 22) 前川峯雄, 前掲書, p. 6.
- 23) 上掲書, p. 7.
- 24) 上掲書, p. 7.
- 25) Williams, J.F.: 前掲書, p.331.
- 26) 上掲書, p. 370.
- 27) 上掲書, p. 374.
- 28) 上掲書, pp. 332-41.
- 29) 上掲書, p. 372.
- 30) Bookwalter, K.W. and H.J. Vanderzwaag: 前掲書, pp. 216-18.
- 31) 上掲書, p. 204.
- 32) Larson, L.A.: 前掲書, はしがき.
- 33) 上掲書, p. 303.
- 34) 上掲書, p. 314.
- 35) 上掲書, pp. 69-70.
- 36) Munrow, A.D.: 前掲書, p. 14.
- 37) 水野忠文, 猪飼道夫, 江橋慎四郎:「体育教育の原理」東京大学出版会, 1973, p. 220.
- 38) 上掲書, p. 222.
- 39) Williams, J.F.: 前掲書, p. 331.
- 40) Bookwalter and Vanderzwaag: 前掲書, p. 224.
- 41) Larson, L.A.: 前掲書, p. 333.